

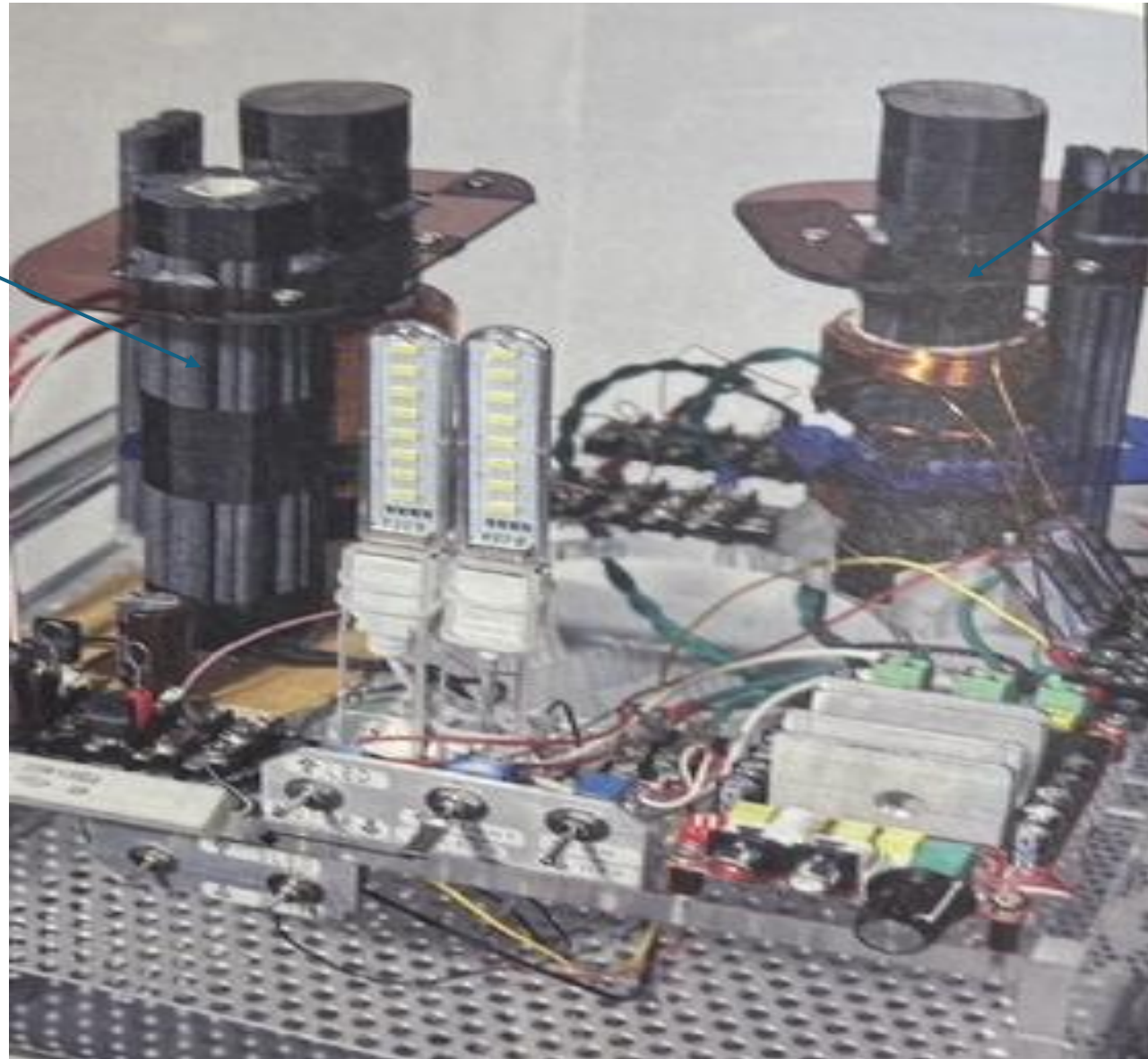
井出治氏共振無入力トランス

2025/02/16

浦野 良一

井出式共振無入カトランス

製作途中

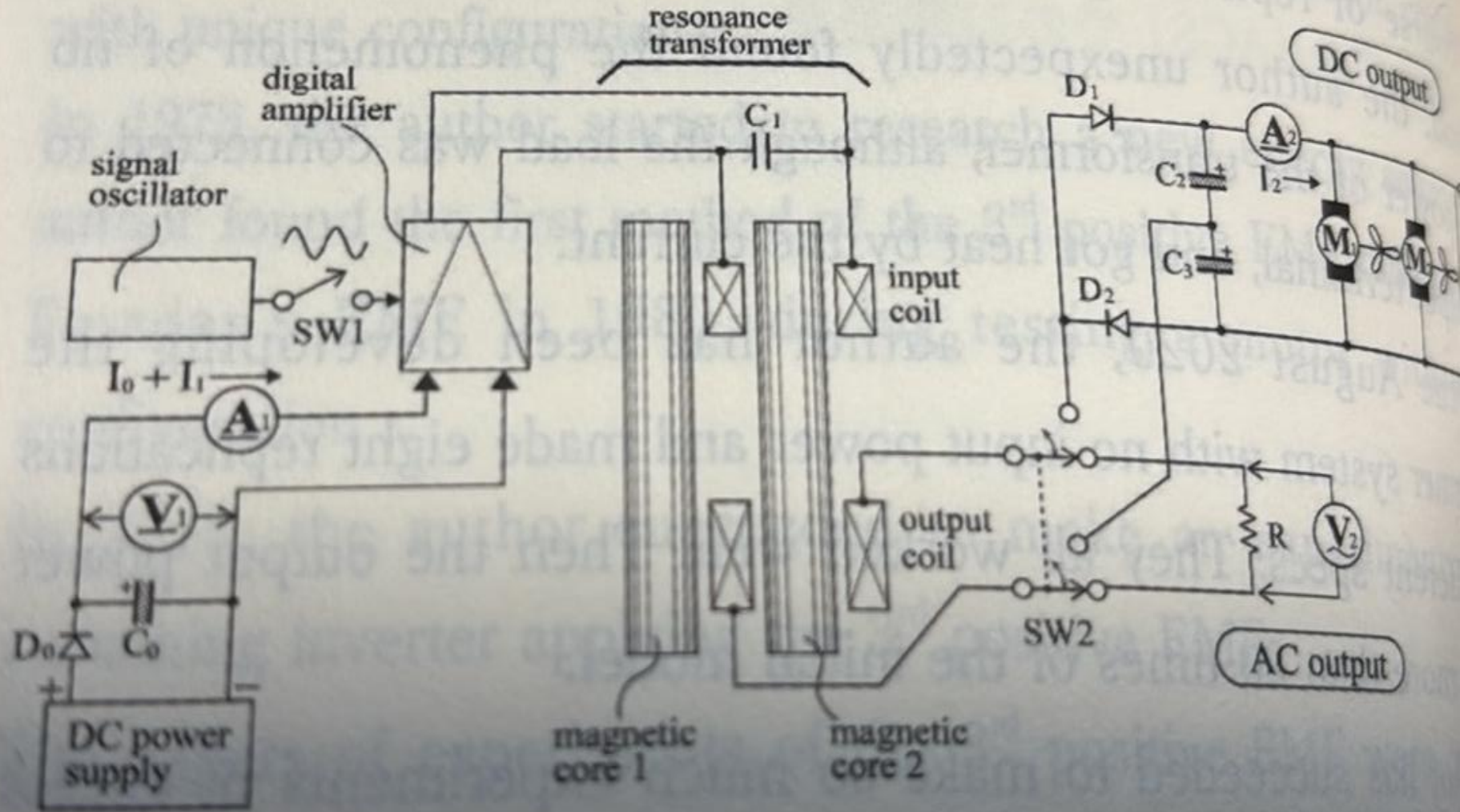


完成品

図1

共振無入力トランス回路図

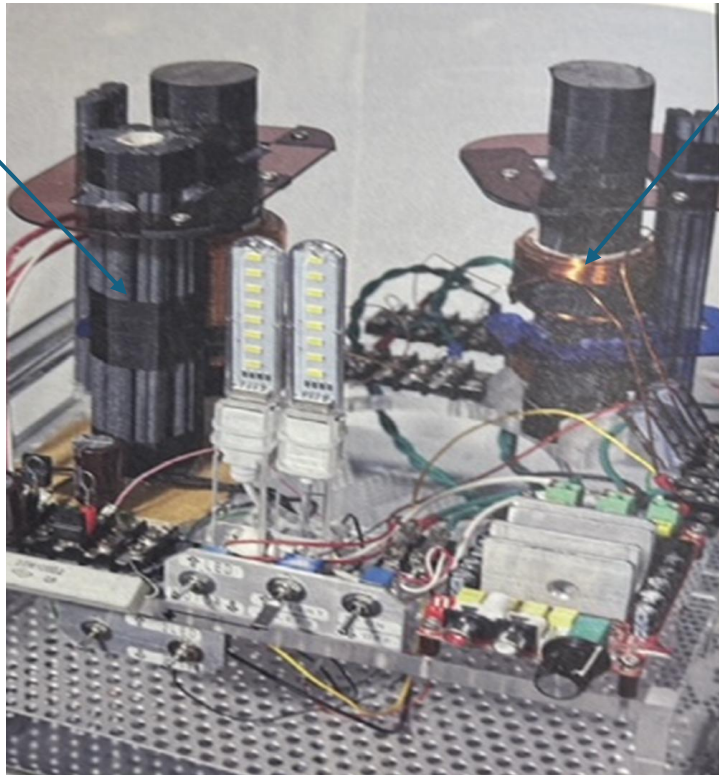
Figure 1



井出式共振無入力トランス

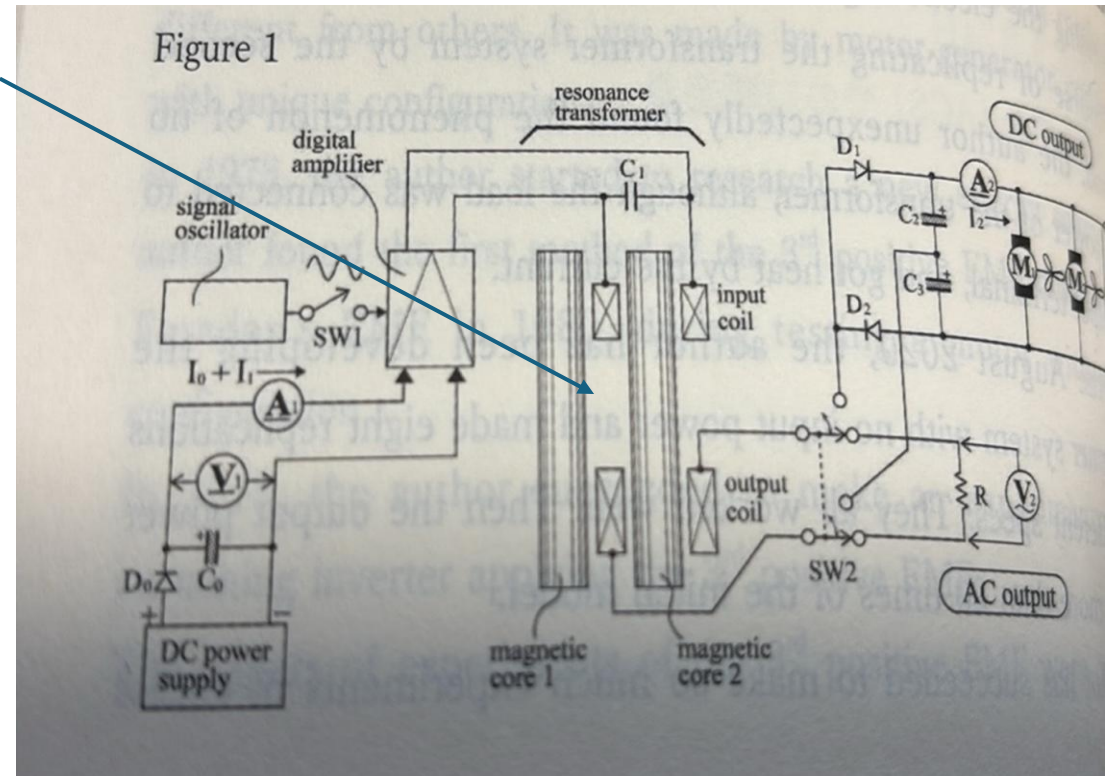
デバイス画像

コアのみ
製作途中

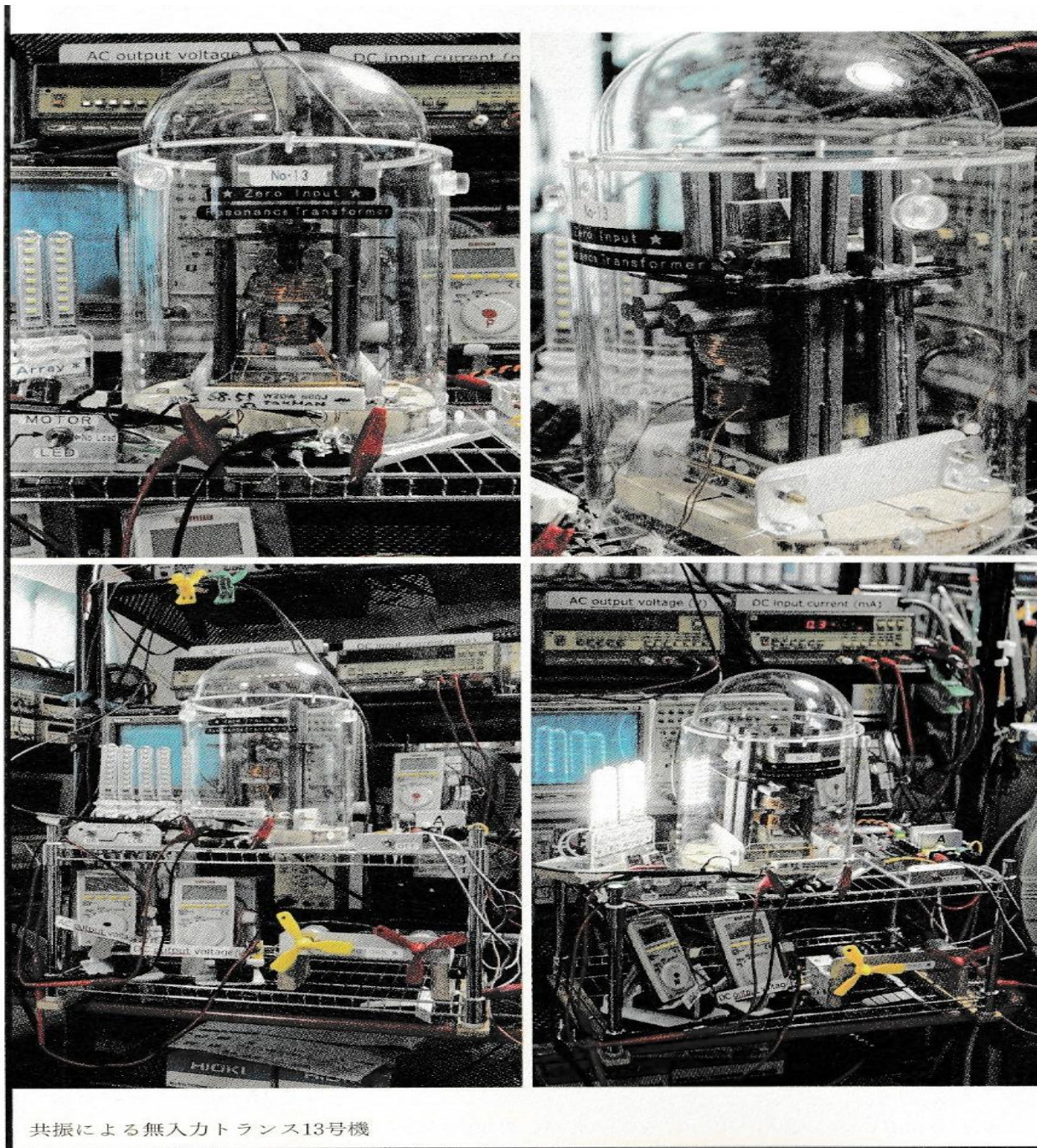


コイル

デバイス回路図



**[井出式共振無入力トランス
13号機]**



共振による無入力トランス13号機

[井出式共振無入力トランス]

- 負荷の増大分に対して、入力が全く増えない、
- 入力が逆に減る状態
- 試作品は15台程度制作
- 共振に必要なコンデンサーは使用していない。
- 磁性体の特徴の一つにヒステリシスがある。
- 磁性体には別の記憶特性、例えば周波数のような記憶特性があるような気がする。
- [井出式共振無入力トランス]
 - 磁束の漏洩が非常に大きい
 - 入力コイルと出力コイルの結合係数が0.1程度
 - 共振状態にすると200%位の効率を発揮
 - トランスの磁気回路が空間に大きく開いているため余分の磁気エネルギーが流入していないかとの仮説が言える可能性がある。
 - 熱力学でいう“開放系”に当たる可能性
 - 共振コイルの共振周波数と同じ周波数を入力すると共振コイルには入力の20~100倍の電磁エネルギーが発生する。
- 無入力トランスが本当の自立型発電機になるのは、トランスの出力がアンプのアイドリングパワーを超えた時。

この現象を発見したのは、共振トランスの実験を行っている時です。トランスに使用している電磁コイルの組み合わせを色々と模索している時、偶然に発見しました。発見した時は大変驚きました。その後、色々なタイプで無入力達成できることが分かりました。試作品は14台くらい作ったと思います。全て「無入力トランス」【写真13】の機能を持っていました。

にもかかわらず、問題はまだまだに理屈が全く不明なことでした。共振トランスの延長にあると思われるが、共振に必要なコンデンサーは使用しておりません。ところが動作をチェックすると明らかに共振しているような状態が生じています。

磁性体の特徴の一つにヒステリシスがあります。外部から磁性体に磁場をかけると、その影響が、かけた磁場を取り去っても残っている現象です。今は記憶素子として半導体が主流になっておりますが、昔は、ヒステリシスによる残留磁場が録音テープ等の記憶媒体に应用されてきました。永久磁石を作るのも同様の方法です。

ところが、無入力トランスやデゴイチの動作を見ると、磁性体にはもつと別の記憶特性、例えば、周波数のような記憶特性があるような気がします。この特徴が無入力トランスの共振特性と関係あるように見えます。

私が作った共振トランスや無入力トランスの外観を電気技術者の方が一見すると、「磁束の漏えいが非常に大きい、従って効率が悪くトランス」という評価をされるでしょう。

なぜなら、共振トランスは入力コイルと出力コイルの結合係数が0.1程度です。したがって、通常のトランスとして動作をさせると、10%以下の効率しか出ません。ところが、共振状態にした途端、200%ぐらいの効率になるわけです。

しかしこれは見方を変えると、次のような仮説も成り立ちます。

「トランスの磁気回路が空間に大きく開いているため、逆にそこから余分の磁気エネルギーが流入しないか？」という仮説です。つまり共振トランスは、熱力学という「開放系」に当たる可能性があります。もしこれが正しいならば、熱力学の法則を破るような現象が生じてもおかしくないわけです。

「共振トランス」には、明白にこのような現象が生じています。共振コイルの共振周波数と同じ周波数の入力をする、共振コイルには、入力の50〜100倍の電磁エネルギーが発生します。この実験が共振トランスのベースとなりました。

「無入力トランス」は、論文化して、2022年3月24日、米国化学会のACS SPRING 2022「エネルギーと燃料」というセッションにおいて、バーチャルによる口頭発表をしました。【巻末資料篇③】

「無入力トランス」が本当の自立型発電機になるのは、トランスの出力がアンプのアイドルングパワーを超えた時です。これは、理屈の上で十分可能で、そんなに困難ではないと推測でき

[参考] MITの磁界共振結合概念図

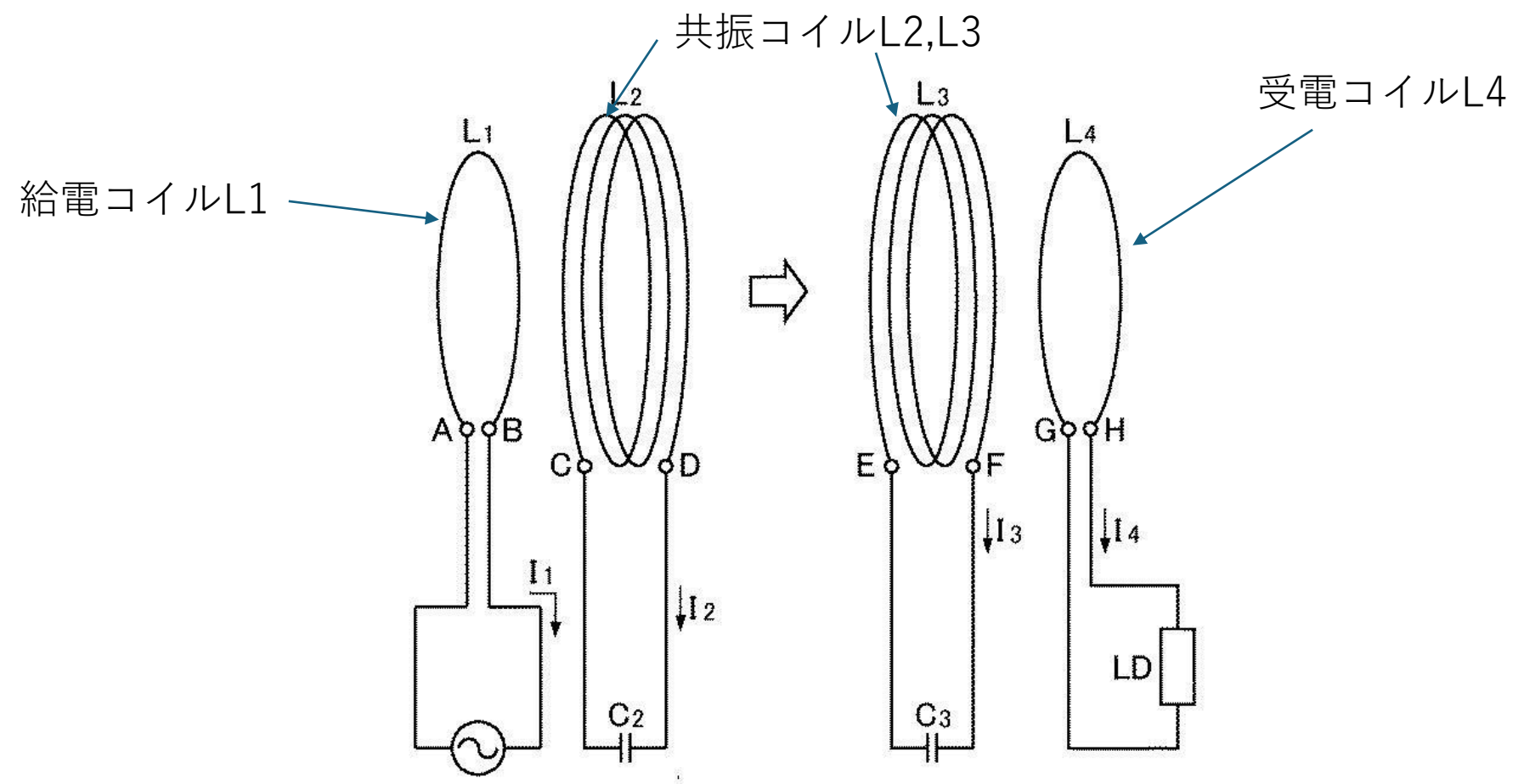


図1